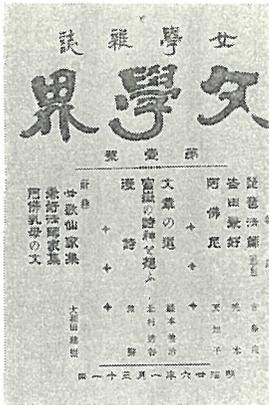


# 同志社と透谷・藤村



河野 仁 昭

北村透谷や島崎藤村については、おそろく伝記的な紹介などする要はあるまい。わたしは最近、必要あって明治期の同人



『文学界』第一号の表紙

雑誌『文学界』（創刊・1創刊、明31・1鹿刊）をひもといていて、その第二号で透谷の評論「人生に相渉るとは何の謂ぞ」を偶然眼にした。透谷の詩は読んでいたが、評論を読むのは不勉強にはじめてであった。『文学界』の大きな収穫は、透谷の評論、樋口一葉の小説、島崎藤村の詩だとする通説のあることは知っていた。全体を通読してみても、わたしもやはりそうであろうと思

った。ところで、右の透谷の評論は、徳富蘇峰が主宰する民友社グループの一人である山

路愛山の「頼襄論」に対する批判文だが、それを契機に、両者の間に論争が展開されることになる。端的に言えば、愛山は文学の目的として世道人心の改善といった実利性を重視すべきだとしたのに対して、透谷は純文学（という言葉を使っている。おそらく純文学論の嚆矢であろう）を唱え、それは武将のごとく「直接の敵を目掛けて限りある戦場に戦はず、換言すれば天地の限なきミステリーを目掛けて撃ちたるが故に、愛山生には空の空を撃ちたりと言はれんも、空の空の空を撃ちて、星にまで達せんとせしにあるのみ」などと言っているように、地上的、物質的、実利的なところに文学の究極の目的はあるのではなく、肉を脱して目に見えない精神的なるもの、「天涯高く飛び去りて、絶対的な物、即ち Idea にまで達」することに文学の目標をおいていたと言っ

よからうと思う。右の論争については、『座談会明治文学史』のなかで、柳田泉、勝本清一郎、小田切秀雄、猪野謙二の四氏が、適切でしかも極めて興味ふかい論評をされている。たとえば、透谷が論争を挑むべき相手は蘇峰で

あつたにもかかわらず、『国民之友』などで世話になつていたので、「エチケツトを心得すぎている文章を書いている」だけであるとか、キリスト教思想には本来、信仰によつて内部生命の方向において救われるという考え方と、神の栄光を地上に増すという現世の物質的繁栄を肯定する考え方が表裏の關係をなしているにかわらず、愛山と透谷はそれぞれ一面のみを強調して分裂させたなどである。詳細は同書にゆずる。

ともあれ、右の「人生に相渉るとは何の謂ぞ」のなかで、透谷は、比喻として、もし実利主義者たちが「吉野山に遊覧し」たならば、桜樹は果実を結ばぬから梅を植えるべきだとか、いや梅より甘藷がよい、い



村崎 藤村

や甘藷の市場価値は極めて低いから、亜米利加種の林檎を植えるべきだ、などと議論するだろうと言つてから、「われは是等が論者が利を算するの速なるを喜び、真理を認むるの確かなるを謝するに吝ならざらん」と欲す、然れども吉野山を以て活用論者の手に委ぬるは、福沢先生を同志社の総理に推すことを好まざると同じく好まざるなり」と書いている。透谷が同志社を引き合ひに出しているこの一カ所だけが、思いがけぬことで、わたしはいささか驚きもし愉快にも思つた。透谷の同志社観の一端が推察できぬでもない。

透谷より四歳年少であつた藤村は、透谷の評論「厭世詩家と女性」の恋愛観に感動して彼に接するようになり、後々まで大き



北村 透谷

な影響を受けたことは周知の事実だろう。その藤村は明治女学校を教え子との恋愛關係によつて辞職し、透谷に後を譲つて、『文学界』創刊当時、関西を放浪していた。旅費は、『文学界』の同人というよりは主宰者にひとしかった星野天知に借りてゐる。

「透谷君の一文、愛山氏も顔色蒼く相成候事と覚え候」（明26・3・7付）といった手紙を、藤村は同人宛に書き送つてゐるが、その発信元は滋賀県蒲生郡八日市のちかくで、天知に紹介された広瀬恒子という女性の実家である。彼女は、当時、神戸市下山手通五丁目に住居してゐて、藤村は関西へやつてきた当初、そこで厄介になつてゐた。

なぜここで広瀬恒子にふれるかといつと、彼女は同志社女学校の卒業生だからだ。古い『同窓会名簿』を調べてみると、杉山（広瀬）恒は明治十九年六月女学校邦語科卒業、更に二十二年の本科卒業生五名のなかにその名がみえる。本籍滋賀県となつてゐるから、おそらく間違ひなからう。

筑摩書房版『藤村全集』第十七巻の注記によると、彼女は同志社を出てから明治女学校へ入学して二十五年に卒業したとなつ

ている。それで、教職のかたわら、同校で『女学雜誌』を編集し、その主筆でもあった星野天知を知ったのだろう。『文学界』創刊以前のことである。二人の関係は恋愛にちかいかものだったようである。藤村が関西へ来た頃は、彼女は卒業して神戸へ帰っていた。

広瀬恒子宛の藤村の手紙が、右の全集に四通収録されている。その一通(明26・4・10付)は、吉野山中から神戸の彼女に宛てたもので、それに次のような一節がある。

「先日の御申越によれば、同志社へ帰校の義につき態々人迄来神有之候旨、委敷はいづれ拜眉の上御心中の程伺申候後にての事に候得共、同じ道の為めとは乍申、様々の方角にむかひて走る人は常に失敗の位置に立ち候様見受候得ば、申迄もなき儀乍ら、万一御帰校に相成候時は、再び同志社を出でざる御決心第一と存候。」

彼女の母校同志社への帰校の事情については、目下のところわたしには調べる手掛りがない。帰校したのかどうかもわからない。それ以後の藤村の手紙から察して、帰校した様子はないらしいとしか言えない。

いずれにしろ、そのころ藤村は小期間京都にも逗留し、安申出身で同志社を卒業し、同志社で教鞭をとっていた詩人の磯貝雲峯を訪問したりしている。同志社へ立ち寄りたことも、おそらくあったにちがいない。

今日以上に明治の世間は狭かったというべきであろうか。それとも当時の青年キリスト者たちは、わたしたちの想像以上に同志社によい関心を寄せていたと言っべきであろうか。

#### 〈付記〉

関西放浪当時の藤村については、勝本清一郎『「春」を解く鍵』上・下(『文学』昭26・3・4月号)の考証が興味ふかい。

勝本は広瀬恒子についても、『春』をめぐる藤村の手紙(『婦人公論』昭25・5月号)のなかで、かなり詳しく言及している。

それによると恒子は、明治女学校高等科を卒業した翌年、神戸市下山手通五丁目にあった神戸・多聞両教会婦人有志が設立した頌栄幼稚園で、米人ハウ女史から保母の教育をうけたようである。関西へやってきた藤村が最初に訪ねたのは、恒

子がその幼稚園にいたときである。

恒子はその後、明治二十八年に上州前橋に私立清心幼稚園を設立し、みずから主任となって経営に当たっていたが、同三十一年一月に杉山重義(当時は岡山市の尋常中学校教員。のち早稲田高等学院長)と結婚した。杉山は若い日に、透谷とおなじ教会でいっしょに講演をしたことなどもあった人である。恒子は昭和二年二月に永眠した。

藤村の自伝的小説『春』に、彼女は「西京の峰子」の名で登場する。

(大学文学部事務長)

